

## がん患者 介護連携の在宅医療

がん患者を地域で支える仕組み作りを話し合う「がん医療フォーラム2017」（正力厚生会、読売新聞社など特別後援）が10月29日、千葉県柏市で開かれた。「柏モデル」として全国的にも高い評価を受ける柏市の在宅医療について、約250人の参加者が医療・介護の現場の担い手から、取り組みを聞いた。

「楽にしていよ」。その声をかけ、在宅医療の専門医・古賀友之さんが、自宅の一室で横になる80歳代の男性のおなかに聴診器をあてる。男性はがんの再発などで入院していたが、今年8月から家族の希望で、自宅に戻った。「大丈夫だね」「お風呂入っている？」。古賀さんが話しかけると、男性は安心した様子で笑顔を浮かべた。

### フォーラムで「柏モデル」の取り組み紹介



医師や介護スタッフらと共に、在宅医療の密な連携体制などを報告した大熊さん（中央）＝千葉県柏市で

フォーラム会場で紹介された映像の一場面だ。

同市の在宅医療の特徴は、医師や薬剤師、看護師、ケアマネジャーらが密接に連携している点にある。顔の見える関係を作ろうと、

様々な職種が200人以上が年に4回、自由に意見を交わす会議を開いている。

患者の情報をインターネット上で共有する仕組みも作っている。例えば、医師が在宅で診察すれば、患者の様子はその日のうちに看護師にも知ることができる。映像の男性のケースも、古賀さんはその場で診察結果をパソコンに入力。その夜には、一緒に男性を支える看護師や介護スタッフらと情報共有していた。

フォーラムでは、在宅医療を支える様々な職種の代表者らが役割などを報告。その一人、看護師の大熊智子さんが「患者さんは24時間、365日私たちとつながることができると。安心して頼ってほしい」と話すと、会場から拍手がわき起こった。柏市医師会の副会長を務める松倉聡さんは終了後、「柏モデルを全国に広めたい」と力強く話した。